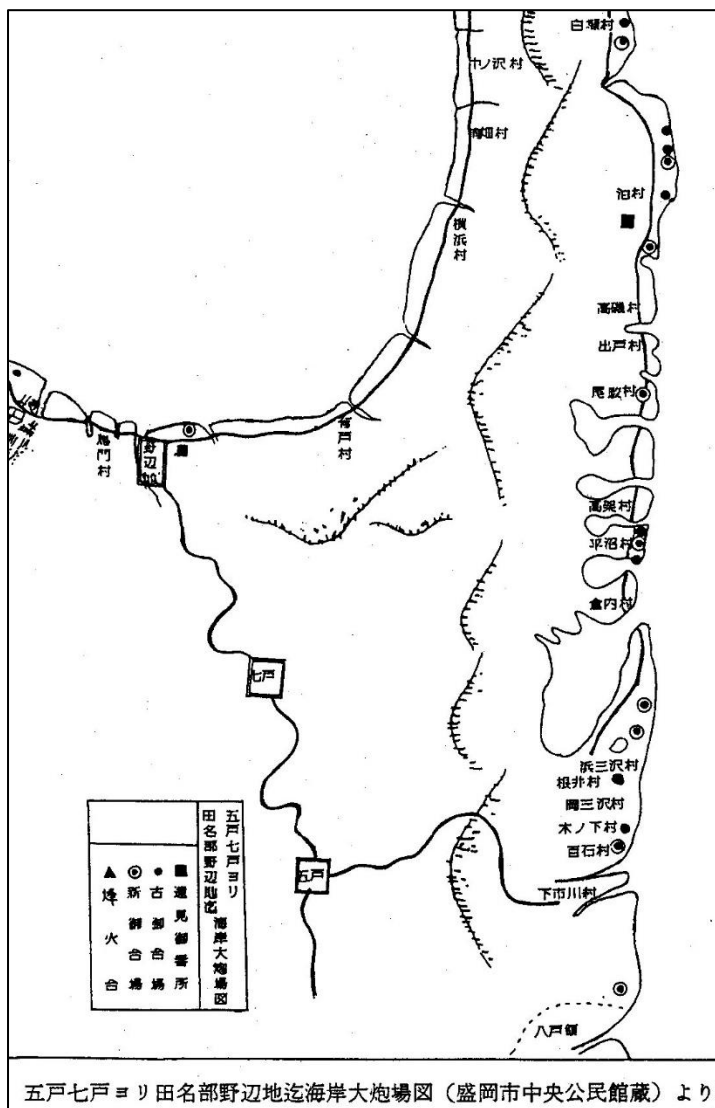


ふるさと歴史散歩「泊編」

1 江戸時代の海岸防備：遠見番所と砲台跡

六ヶ所にも
お台場が
あったの？



五戸七戸ヨリ田名部野辺地迄海岸大砲場図（盛岡市中央公民館蔵）より

江戸時代初期から北浜街道泊村には、外国船の見張りにあたる**浦番所**が1カ所、**御台場**が1845（弘化2）～48（嘉永元）年に築造、1856（安政3）年には新旧合わせて9カ所に置かれていた。

- (1)1644（寛永21）年4月26日以降、盛岡藩は20カ所の**浦番改め**を行い、**同心**を派遣している。北浜街道には、5カ所。八戸物見崎、六戸浜根井、東浦のうち泊、田名部のうち尻屋、同所尻労の5カ所に浦番所が置かれていた。
- (2)1699（元禄12）年「郷村古実見聞記」泊ノ崎と中山崎の2カ所。泊村上町六助に御普請申付候。
- (3)1804（文化元）年、南部領全体で10カ所に減り、北浜街道では泊と志利屋の2カ所に減少。
- (4)1808（文化5）年、正月、領内海岸警備の員数を幕府に届けた。七戸浦192人近村の**獵夫**に鉄砲を交付。非常の場合警備隊に参加させることとした。
- (5)1849年（嘉永2）年、七戸代官所の職制に、泊村**遠見御番人**として3人の御給人が指名されている。
- (6)1856（安政3）年4月、公儀の達に基づき、南部藩主利剛が領内を、漆戸茂樹と共に連れ巡視し、泊、尾駁、平沼で台場を検分（遠浅を批判）。泊の台場では射撃を試み、田名部大間沖では砲艦の演習を行わせ、6月1日に盛岡に帰っている。

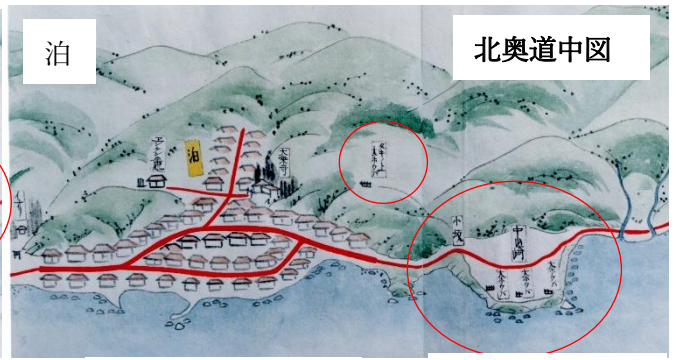
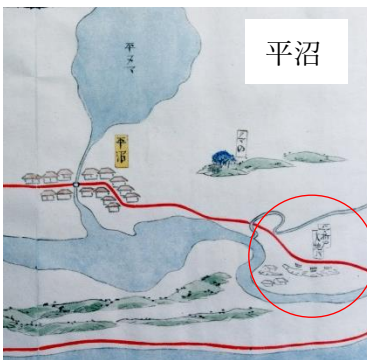
（六ヶ所村史上巻Ⅱ 第18章より）

注1）南部 利剛（としひさ：1826年～1896年）は、陸奥国盛岡藩の第15代藩主。第13代藩主・南部利済（としただ）の三男。利済のころに築いた華やかな新御殿や津志田の遊郭を廃止。自身の1年間の費用を210両とし、平素は木綿を用い、油を節約するために夜食後は燭台を行灯に換えたと言われている。また**北方警備の強化**にも努め、守備隊を派遣するなど国事に尽くし、中將に任ぜられた。藩の教育振興にも力を注ぐ。1865（慶応元）年、藩校明義堂を拡張して作人館と改称、文学・武芸・医学3科の**教育体制を整備**。洋学校日新堂の開設を援助。原敬など明治以降に活躍した優秀な人材が多数輩出された。しかし、藩政再建に関して家老の楢山佐渡と、同じく家老で極端な改革を進める東政図（まさみち：中務）が対立するなど、藩政は迷走。1868年（慶応4年）に盛岡藩が**戊辰戦争に敗れ**、利剛は謹慎を命ぜられて東京へ護送される。そして同年12月に藩主の座を退き、嫡子利恭（としゆき）に家督を譲った。温厚で情義に厚く、茶道や能楽、和歌などにも精通。歌集『桜園集』を残す。（盛岡市HPより）



2 七戸浦の台場と大砲（筒）について「海岸御台場御筒海岸炮台書」より

海岸御台場御筒海岸炮台書 七戸浦	
泊村	一、中山崎北手之方 一、老貫目木炮 一、同所中程 一、三百目唐銅筒(からかねつて但割菱御紋付)
一、同所南手	
一、老貫目唐銅筒	
一、泊村館の上	
一、三百目唐銅筒	
一、泊村六角	
一、七百目唐銅筒	
一、尾駁村鷲森	
一、五百目唐銅筒	
一、平沼浜下り戸北手之方	
一、三百目唐銅筒	
但雲竜形割菱御紋付	
四つ車台付なり	
長サ四尺余にて能き御筒也	
一、同所中程	
一、三百目唐銅筒	
一、同所南手	
一、老貫目木炮	



北奥道中図

ハマ折戸大砲バ

大砲バ

タテノ上大ホウバ

中山崎大ホウバ

注2) 北奥道中図とは、江戸時代に作成された陸路あるいは海路を記した絵地図のことである。今日の道路地図と観光案内を組み合わせた要素を持つ。

(1) 筒・大砲について：日本では、洋式銃のように口径ではなく、発射する弾の大きさを「玉目」すなわち重さであらわし区別した。

① 老貫目木炮について

一貫目玉（3.75kg）の木製の大砲。一回使って終わり。戊辰戦争では、こうした木製大砲が使われたこともあった。



② 三百目・五百目唐銅筒について

種 類	総長	砲身の長さ	砲身の内径	材料の青銅の重量
三百目玉唐銅御鑄筒	121.2cm	108.5cm	5.9cm	234.0kg
五百目唐銅御鑄筒	160.6cm	142.4cm	10.2cm	398.6kg



三百目玉唐銅御鑄筒

(2) 中山崎大砲台場之図・絵地図と現在の地図

